

～つくば市長と筑波大学長が語る～

# 「未来の街づくり」 のための パートナーシップ

つくば市長 **市原健一氏** × 学長 **永田恭介**



## 筑波大生のパワーを つくば市の街づくりに

**永田**：昨年度は、筑波研究学園都市の建設が閣議決定されてから50周年という節目の年でしたし、筑波大学も開学40周年を迎えたということで、つくば市、筑波大学ともに、記念すべき年でした。市原市長とは、式典などでよくご一緒させていただき、大変お世話になりました。さて、いよいよ平成26年度がスタートし、本学も多くの新生を迎えます。まずは、新生へのメッセージからお願いいたします。

**市原**：ようこそ、つくばへ。これからの4年間で、筑波大学の素晴らしさだけでなく、つくばの街の良さも実感していただくと確信しています。そして、つくばがよりよい街になるよう、これからの街づくりに

に参加していただきたいと願っています。市内に、経済産業省の「新・がんばる商店街77選」(平成21年公表)にも選ばれた北条商店街がありますが、竜巻で大きなダメージを受けました。災害復興に向けて、筑波大学の先生や学生みなさんが、古民家や古い街並みの再生などに取り組んでくださっています。このように、筑波大学が、つくば市の街づくりに大きな関わりを持ってくださることは、とてもありがたいことだと思っています。特に学生さんにはすごいパワーがありますからね。つくばは、非常に先進的なことが望まれているので、普通ではだめなのです。よその手本になるような、新しい試みをやっていかなくちゃいけない。そのためにも、学生さんたちのパワーをお借りして、さらに斬新な街づくりにチャレンジしていきたいと思っています。

**永田**：昨年9月には、市長と学生との懇談会を開催していただきました。

**市原**：はい、昨年初めて開催し、80人ほどの学生さんから、市政への提案や要望を伺ったり、お話ししたりしました。このような機会を、これからもいろいろと設けていきたいですね。それからもうひとつ。つくば市に就職した、筑波大学の卒業生が非常にたくさんいらっしゃいます。平成25年度も事務職を25人新規採用しましたが、ほぼ半数が筑波大の卒業生でした。応募者も半数くらい筑波大生や卒業生なんですけど…。せっかくですから、卒業生の職員たちと在校生が情報交換できる機会が作れたらいいと考えています。

**永田**：それは、学生だけでなく、保護者の方も望まれていることだと思います。ところで、私もお聞きしたかったし、学生た

ちにも役立つと思うのですが、整形外科医でいらっしゃった市長が、政治家に転身された理由を教えてください。

**市原**：茨城県議会議員だった父が急逝し、父を支援してくださっていた方々に薦められて、「まあ、ちょっと」ということで始めたのがきっかけです。始めた後に引けなくなり、続けているうちに、周りの人から押されて市長になりました。きっかけはこのような感じですが、医者も、市長の職も、「自分が人の役に立っている」ということが実感でき、なってとてもよかったと思いますね。そのやりがいを支えに、「私」を捨て、ほとんど「公」という日々をずっと送っています。

## 研究学園都市 50周年 筑波大学 40周年を迎えて

**永田**：研究学園都市が50周年を迎え、これまでを振り返って、どんな思いでいらっしゃいますか？

**市原**：研究学園都市が作られた目的というのは、東京の一極集中が激しかったので、その緩和をしようということ。そして、日本の科学技術と高等教育の充実振興を図るということです。今や、研究学園都市は、科学技術の集積で世界的に有名な地域となっていますが、そうした地域を誕生させることを国が50年前に決定したということは、素晴らしいことだと思っています。しかし、その目的が十分達成されたかという、まだ若干足りないような気もしますが…。

**永田**：筑波大学も感覚的なものは似て

います。何もなかったところに研究学園都市を作ったように、何もなかったところに、歴史のある東京教育大学という前身校を解体して、新しく筑波大学を建てました。どこにもないタイプの新しい日本の大学を作っていきましょうというのが基本でした。すべてのものに対して「開かれた大学」というコンセプトと、絶えることのない改革を続ける「不断の改革」というコンセプトで表されています。この40年間は、この基本的性格を咀嚼するのに使ったようなものだと思います。今、ようやく咀嚼できて、これから自由闊達に、建学の理念を携えて歩いていくのではないのでしょうか。

**市原**：つくば市や筑波大学を取り巻く環境はどんどん変化しています。筑波大学ができた頃は、きれいに整備された近代的な街になってきていたけれど、





## 市原 健一 氏

つくば市長

1951年 つくば市(旧大穂町)生まれ  
 1979年 北里大学医学部卒業  
 1993年 茨城県議会議員(連続4期)  
 2003年 茨城県監査委員  
 〃年 茨城県病院協会会長  
 2004年 つくば市長

冷たくて、人工的な街というイメージがありました。それから10年、20年と経ち、人間らしい薫りが漂うような、落ち着いた街になってきた感じがします。これからは、さらに一歩進めて、「この街はすぐく住みやすい、快適だ」と感じられて、いろんな活動ができ、子どもたちがいろいろな教育を受けられる、そういう環境が整った街にしていきたい。そして、そのために科学を活用することが「つくば」らしいと考えています。よそにないような先導的な科学技術の取り組みが、福祉に役立ったり、人間の暮らしを向上させたりする、それを実践する場になりたい。市は、テクノロジーなどのノウハウをあまり持っていないので、筑波大学や研究機関の協力をいただいて、技術的なものや仕組みを一緒になって作り上

げていただきたいと思っています。

**永田**：研究学園都市50年、本学40年、ようやく、市と本学と周辺の研究機関や企業が力を合わせて、何かを実現する段階になってきた感じですね。本学には、あらゆる分野における基礎研究と、社会に役立てようという応用研究があります。ところが、ここから先がありません。例えば、新しく開発した薬であれば製薬会社、新しいオイルができれば、そういうオイルを製品化する会社が必要ですし、ロボットができれば、町で歩きまわる許可がいる。こうした社会への実装段階には、行政や企業との連携が必要です。研究学園都市の歴史を背負っているつくば市は、研究成果に対して目端が利いていて、共同研究や共同作業がやりやすいように考えていただいているので、ありがたいです。

**市原**：ここ数年、生活支援ロボットや藻類バイオマスエネルギーなどの実用化を目指す国際戦略総合特区プロジェクトなど、いろいろな取り組みを一緒にやるようになって、つくば市と筑波大学の距離がどんどん縮まっています。これからの50年で、世界の科学技術の振興と、いろいろな課題解決のために、研究学園都市の科学技術が役に立っていくのではないかと期待しています。

**永田**：つくば市は、サイエンスシティとうたっていますが、さらに前進して、グローバルなサイエンスシティ、世界に冠たる科学都市になっていくでしょう。ただ、持続性のある国際都市を作るためには、世界中からやって来る優れた研究者の生活を、我々がしっかり支えなければなりません。話すことや食べることだけではなく、医療や子弟の教育まで保証しないと…。こうした、医療の面や地域全体の教育についても、我々は貢献していくつもりです。

**市原**：教育といえば、つくば市は今、「教育日本一」への取り組みをやっています。その中で「つくばスタイル科」という新しいカリキュラムを作り、文部科学省に特例で認めていただいて実践していますが、このカリキュラム作りも、筑波大学の先生方に協力していただきました。

## 2020年東京五輪・パラリンピック開催に向けて

**永田**：2020年に、東京オリンピック・パラリンピック開催も決定しましたし、グローバルサイエンスシティを目指すと同時に、スポーツ振興も進めたいところですね。本学は、科学的センスでトップアスリートを育てるという意味では、先導的な大学だと自負しています。柔道、陸上、サッカー…それぞれの競技に科学的な指導力を持った指導者がいますし、世界基準の選手もたくさんいますから、スポーツ振興の面でもさまざまな形で貢献できると考えています。

**市原**：つくば市では、総合運動公園を作る計画を進めています。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの前には完成させて、諸外国のアスリートのトレーニング地として使っていただけるようにと考えています。

**永田**：つくばは、東京までつくばエクスプレスで45分。諸外国のアスリートたちには、理想的な距離です。ここに長期滞在して、時折コンディションを見極めに東京に出かけて、ゆったりとした自然の中にまた戻って練習すると…。つくば市がそのための環境を整えることに、非常に期待しています。



**市原**：パラリンピックは、義手や義足、目が見えない方の誘導など、いろいろなテクノロジーが必要な分野です。ここでも、筑波大学に協力していただいて、「テクノロジーによる障がい者スポーツの支援」というコンセプトを入れながら、施設整備をしていきたいと考えています。そういう運動施設ができれば、障がい者の方も、高齢者の方も、市民のみなさんも、一緒にスポーツを楽しむことができる拠点になるでしょう。

**永田**：パラリンピックも、厚労省管轄から文科省管轄に変わりました。我々の大学にもすぐ期待されている部分がたくさんあります。筑波大学は、視覚特別支援学校などの特別支援学校を5つ持っていますし、障がい科学や、スポーツ医学というような専門分野もあるので、パラリンピックにも、大きな貢献ができると信じています。

## チャレンジ精神と逞しさを兼ね備えて

**永田**：最後に、筑波大学の学生を含めた、若い世代にエールをお願いいたします。

**市原**：「本当にこれがやりたい」ということが決まっていて、どんなことがあつてもただ一直線に突き進むということは、非常に重要なことだと思います。でも、それと同時に、いろんなものにチャレンジするというのもまた重要です。自分が知らないものでも、いろんな可能性があるし、道は開けるものです。ですから、ひとつのものを極めるものいい、だけど、いろんなものに挑戦し、経験を重ねて自分を磨く、そういうことにもチャレンジしてほしいと思います。そしてその中では、1回や2回の挫折にめげずに、雑草のごとく、踏まれても踏まれてもまた復活する、そういう逞しさを身につけていただきたい。時折、男子学生に、弱々しさを感じる時があるのですが、逞しくなる潜在的な能力は必ず持っていると思います。自分の力を信じて、頑張ってくださいですね。

**永田**：今の言葉、本当に、含蓄豊かだと思います。学生は、失敗が許されるのが特権ですから、失敗を恐れずに挑戦して、たとえ失敗しても、それをバネに大きく成長してほしいものです。本日は、どうもありがとうございました。



## 永田 恭介

筑波大学学長

1953年 愛知県生まれ  
 1981年 東京大学薬学研究科博士課程修了  
 1985年 国立遺伝子研究所分子遺伝子研究系・助手  
 1999年 東京工業大学生命理工学部・助教授  
 2001年 筑波大学基礎医学系・教授  
 2012年 〃 学長特別補佐  
 2013年 〃 学長